

### 3 ことばクリニックの挑戦Ⅲ —新たな患者層への支援—

○栗崎由貴子<sup>1</sup>, 入山満恵子<sup>1</sup>, 大平 芳則<sup>1</sup>, 青木さつき<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻 <sup>2</sup>附属歯科診療所ことばクリニック)

【はじめに】ことばクリニックは、本年度から新たな取り組みとして脳血管障害等後遺症患者への臨床を開始した。そこで今回はこの約半年間を振り返り、受診した患者層を調査したので報告する。

【対象】平成18年2月から11月までの期間に本クリニックに来室し、言語聴覚療法を受けた後天性障害患者6名(男性5名, 女性1名)。

【方法】言語聴覚療法記録をもとに, 1. 原因疾患, 障害名, 本施設初診時年齢, 2. 他の診療機関での言語聴覚療法経験の有無, 3. 本施設受診に至った経緯と理由について後方視的に調査した。

【結果】1) 原因疾患は脳出血2名, 脳挫傷4名。脳挫傷は全例交通外傷であった。障害は失語症3名, 高次脳機能障害2名, 高次脳機能障害と運動障害性構音障害の合併1例であった。本施設受診時の年齢は13歳~60歳までで, 平均年齢は33歳であった。2) 6例中5例で他機関にて言語聴覚療法の経験があった。3) 紹介元は新潟

県リハビリテーションセンター2名, 脳外傷友の会2名, 福祉事務所1名, 介護支援専門員1名であり, 開始当初想定された「高齢者」「嚥下障害」「在宅支援」等のニーズはなかった。受診者は, 他機関において「言語聴覚士不在」, 「リハビリの対象年齢外」, 「多忙を理由に継続してくれない」などの経験から, 本施設へは「病院に比べて融通がきく」「専門的サポートが受けられる」「福祉・教育・就労機関と連携が密である」を理由に長期的な支援を希望して受診していた。

【考察】医療制度におけるリハビリテーションは年々短期化する傾向にあるが, 本クリニック受診の後天性障害者は若年が多いので, 機能訓練のみならず社会参加に向けた長期的な支援を提供していく必要がある。教育機関附属施設という恵まれた環境を長所として, 他医療機関では不十分となりがちな福祉・就労までをサポートする施設として地域に貢献していくことが大切であると考えられる。

### 4 ことばクリニックの挑戦Ⅳ —運営改善への提言—

○大平 芳則<sup>1</sup>, 青木さつき<sup>2</sup>, 入山満恵子<sup>1</sup>, 栗崎由貴子<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻 <sup>2</sup>附属歯科診療所ことばクリニック)

【はじめに】本クリニックが現在抱えている問題に言及し, それに対する改善策について提言する。

【問題】新潟市およびその周辺において, 小児の言語障害について助言・訓練を実施している施設が少ないため, 増え続ける患者および保護者はもとより, 教育委員会からも本クリニックの活動は期待されている。しかし, 人員上の制限からそれに十分応えることができないのが現状である。本年4月より教員の体制が変わったことにより, 教員も臨床活動を本格的に行なえるようになり多少改善されたが, まだ十分とはいえない。言語聴覚士(以下ST)の業務は飽和状態にあり, 患者の要望に応えるべく訓練予約ができない状況である。また, 4月より, 発症から180日を超えると原則的にリハビリテーション(以下リハ)は中止となり, さらに改善の見込みがある, と医師が診断した場合にリハを継続できることとなった。そのため, 発症から180日以上経過した, 後天性障

害を持つ患者の受け入れが, スムーズにできなくなった。

【方策】本クリニックに寄せられる期待に十分応えるには, STを増員することが必用であると考えられる。また, 発症より180日を超えた患者のリハに対する要望は強く, 必用な場合には医師の診断によりリハを継続できる可能性がある。本診療所に医師が勤務することができれば, より幅広い患者を受け入れることが可能となる。

【課題と今後】STの増員と医師が勤務することにより, 様々な問題も生ずる。人員をどう確保するか, というところから始まり, 訓練室やコスト等の問題が解決されない限り, 実現は困難である。しかし, これらの問題の解決策を模索し実現することは, さらに質の高い医療サービスを社会に提供できるということを意味する。また, 専任STを3人確保できれば, リハの診療報酬は単価で現在の2.5倍となる。以上のことは, 本クリニックのさらなる発展と社会貢献につながるであろう。